

## 学校や保護者との連携を深め、再登校へつながった事例

### 《概要》

- 当該生徒は、中学校第2学年の生徒である。第1学年の12月頃から、学校を欠席することが多くなり、3学期には、登校することができなくなった。第2学年への進級時、学級編成等の学校の配慮により、4月当初は、連続して登校することもできたが、学習への不安感もあり、再び登校することができなくなった。
- 適応指導教室において、教育相談を充実させるなど、当該生徒が安心して通室できるよう努めた。また、学習への不安感を取り除くために個に応じた学習支援を充実させた。

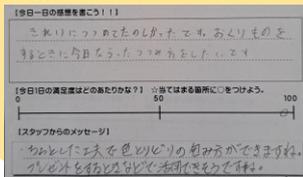
### 《相談・支援等の実際》

#### 目標・方向性

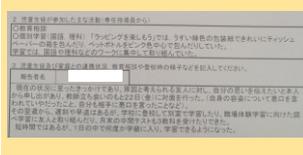
- 安心できる居場所づくり



- 個に応じた学習支援の充実



- 学校・家庭との連携



#### 相談・支援、取組等の状況

- ・当該生徒が自分のよさに気づき自己肯定感を高めることができるよう適切な距離感と対話を大事にして信頼関係の構築に努めた。
- ・当該生徒の体験的な活動や学習をサポートし、活動や学習の振り返りに対して前向きなメッセージをスタッフが記入したり、声かけをしたりし、自己肯定感が高まるように配慮した。
- ・学習では自己決定による目標を設定し、計画的な取組につながるよう支援した。苦手な教科を中心に教科書とワークブックやドリルなどの学習教材を併用し、分かったことを実感させ、自信をもつことができるようにするとともに意欲が高まるよう配慮した。左写真は、当該生徒が作成した振り返りの一部である。
- ・学校との連携では、通室・登校の状況を相互に情報共有し、学校の取組を具体的に把握して支援の手立てに生かした。左写真は、通室・登校状況報告書の一部である。
- ・保護者との教育相談では当該生徒の現状を共通理解した。また、学校や保護者との密接な連携を図るよう努めた。

### 《取組の成果》

- 当該生徒は、教育相談の継続的な実施により、中学校卒業後の進路や将来就いてみたい職業など、自分の思いを指導員に少しずつ話をするできるようになるとともに、主体的に学習したり体験学習に参加したりする姿勢が見られるようになった。
- 個に応じた学習支援を充実させたことにより、生徒自身が、分かったことやできるようになったことを実感できたことで、主体的に学習する意欲が高まり、在籍校における授業参加や定期テストの受験につながった。さらに、登校し学習を進める必要性を強く感じたことで、9月中旬に自らの意思で登校を再開している。

## 進学に向けた取組を通して、関係機関との連携が増えた事例

## 《 概要 》

当該生徒は、小学校第3学年の5月から適応指導教室への通室を開始し、中学校第2学年末には、適応指導教室への通室と、学校への登校ができるようになり、第3学年を迎えた。

段階的に学習内容を発展させ、継続して課題に取り組ませることにより、自信をもって学習したり、家族以外の人と接したりすることができるようになることを目指してきた。

第3学年の1学期は、家族同伴により修学旅行に参加したが、9月以降は進学に対する不安から通室不可になった。現在は、関係機関が連携し、高校進学に向けた取組を進めている。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 目標・方向性

目標や方向性 1  
学習や運動に対する  
自信と達成感の育成

目標や方向性 2  
高校進学に対する不安  
と今後の生活への  
支援、保護者の変化

## 相談・支援、取組等の状況

- ・通室当初は、母親の付添が必要であるなど、経験不足からくる不安が著しかったため、通室を繰り返し、教室に慣れさせることを重視し、自信をもたせた。
- ・かけ算九九を習得し、四則計算の意味を理解して筆算で正解を導き出すことができるようになると、算数が面白く得意だと感想をもつようになり、計算以外の領域にも取り組むようになった。
- ・適応指導教室に学習端末を常備することにより、学級担任と学級活動を行ったり、文章入力機能で作文を書いたりするようになった。
- ・継続的なウォーキングやサイクリングの取組による持久力の向上や、バドミントンやボッチャなどの技能の上達を周囲から認められたことにより、当該生徒の運動に対する自信につながった。
- ・高校進学に対する不安から通室ができなくなり、他人との接触を怖がるようになったため、医療機関を受診した。
- ・学校見学や三者面談、支援施設の説明会などには、父親も積極的に同席して、今後の在り方について考えをもつようになった。
- ・学校、医療、市役所福祉課が連携し、家庭訪問による当該生徒との面会も実施しながら、高校進学への取組を進めている。

## 《 取組の成果 》

小3から中3までの期間、継続して国語や算数の課題に取り組んだことにより、学習課題に対する自信や、やる気をもつことができた。また、学習端末を常備したことにより、当該生徒が興味をもち、ビデオ会議ツールで学級活動を行ったり、文章入力などに取り組んだりすることができた。

現在、適応指導教室への通室や人との接触は難しくなっているが、関係機関の連携により、当該生徒及び保護者が、今後の進学先や将来の生き方について考えるようになった。また、義務教育終了後の当該生徒及び保護者を見守る連携の輪ができつつある。

学校内の別室登校への支援

《 概要 》

不登校傾向の生徒は、自分の教室に入ることが極端に難しくなってしまうため、生徒と面談した上で、その生徒の実態・状況に応じた「活動の場」を提示するようにしている。

学校内の別室登校用の空き教室に、別室登校する生徒の人数が増えてきたため、学校の教職員の補助的な役割を行うため、本課の職員も学校に出向いて支援を行うことにした。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

ステップ1

教育相談センターでの面談

ステップ2

学校内の別室で活動を行う

ステップ3

スモールステップによる活動の場の変更

相談・支援、取組等の状況

- ・教育相談センターで、保護者や当該生徒と、2～3回面談をして、当該生徒の現状がある程度把握できたら、学校内の空き教室への別室登校の提案をしている。
- ・後日、当該生徒と学校の生徒玄関前で待ち合わせをし、一緒に校内に入り、別室で面談やプリント学習等を行う。その後、別室に行くことに慣れてきたら、学習支援を中心に行っていくようにしている。
- ・別室での活動に慣れてきたら、当該生徒に確認した上で、ゆっくりと活動の場のステップアップを提案している。
- ・学期や学年が変わる節目の時期に、ステップアップすることができる場合が多い。
- ・自分の教室に戻るには、かなりの時間を要するが、別室とは言え、学校に登校することから、教職員や友人と接する場面が増え、いろいろなよい刺激を受けるようである。

《 取組の成果 》

不登校傾向の生徒にも、心の中には「学校へ行きたい」という思いがあるとの考えの下、別室登校を提案するようにしている。また、別室登校の教室の運営が軌道に乗っても、学校の教職員だけで対応していくにはマンパワーが不足していると思われるため、本課の職員も学校に出向いて、学校の教職員と一緒に別室登校への支援をしている状況である。

## 「主体性の尊重」・「心の居場所づくり」を柱とした個別指導

## 《 概要 》

当該生徒は、小学校高学年時に体調不良で休みがちになり、中学校入学後に不登校となった。「主体性の尊重」「心の居場所づくり」を柱に、「基本的な生活習慣の改善」「基礎学力の定着」「豊かな情操・社会性の育成」の3つを支援の目標として設定した。

通室日を予約制とし、一週間の適応指導教室への通室日を設定した。当該生徒と指導員が適応指導教室で取り組む内容を相談し、学習をはじめ体験活動や教育相談等を実施した。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 目標・方向性

目標や方向性 1  
基本的な生活習慣の  
改善

目標や方向性 2  
基礎学力の定着

目標や方向性 3  
豊かな情操・社会性  
の育成

## 相談・支援、取組等の状況

- ・当該生徒は、朝なかなか起きることができない状況にあったことから、規則正しい生活リズムをつくることを目標の一つとした。
- ・当該生徒は生活リズムに課題があると認識していたことから、遅く起きた場合にも、できる限り休まず通室するよう働きかけた。
- ・適応指導教室で取り組む学習や体験活動等の内容については、当該生徒が指導員と相談しながら主体的に決めて実施した。
- ・学習については、教科書やワークブックを活用した自学自習を基本に、指導員が当該生徒からの質問に答えるなどしてサポートした。
- ・当該生徒の主体的な活動を尊重するとともに、悩みや思いを受け止め、誠実で肯定的な関わりをするよう努めた。
- ・人と関わる力を育むとともに、当該生徒が「明日も教室に来たい」と思えるよう、他者との会話が楽しめる軽スポーツやゲーム、パズルなど多様な体験活動等を取り入れるなど、工夫改善に努めた。

## 《 取組の成果 》

主体性を尊重した指導、生徒個々の実態に即した教育相談や学習支援、多様な体験活動等の取組は、すぐに学校への登校意欲につながらないが、適応指導教室では、意欲の高まりが見られ、「学びに向かう力」につながった。

心の居場所づくりの取組は当該生徒の心理的な安定をもたらし、自己肯定感や自己有用感、自信が生まれたことにより、当該生徒の心身の状態が好転するなど、学校復帰や将来的な社会的自立に向けて必要となる力を育む一助となった。

## 上富良野町教育支援センターMina✿Mina 開設について

### 《 概要 》

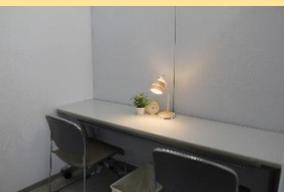
不登校の対応は、学校のみ任せず、「町の子どもたちは地域で育てる」という考えの下、関係機関が協力して取り組む必要がある。上富良野町では、「教育支援センター」という単なる場の設置だけに留まらない、学校との協働を意識したシステムづくりを目指している。

そのシステムは、不登校に限らず児童生徒の様々な問題への予防的なアプローチとしての1次的支援、学級担任・特別支援COとの情報交換をきっかけに学校現場で介入する2次的支援、不登校状態を含む児童生徒及びその家庭に直接介入する3次的支援の階層を網羅するものである。

### 《 相談・支援等の実際 》

自分のペースで居心地がいい！

発達環境デザイン研究所  
「SOLODY」による子ども  
たち目線の空間デザイン



**相談・支援、取組等の状況** 子どもを中心とした信頼できる「つながり」

\* 心理の有資格者を含む、計4人の職員が対応

ボードゲーム等を通したコミュニケーション、分かるところから取り組む学習活動等、当該生徒が「楽しい！やりたい！好き！」と感じられるような多種多様な活動

\* 中学校における情報共有

欠席累計が30日前後になる生徒やセンターに通所している生徒について、学級担任とセンター職員が日常的に情報共有

\* 小学校におけるサポートミーティング

特別支援COとセンター職員による月1回の情報交換。必要に応じて対応策の話合いの実施

\* アセスメントやコンサルテーション

学級に入ってから行動観察、各種検査結果について保護者や学級担任、特別支援COと共有。町内各子ども園、発達支援センターにおける行動観察及びコンサルテーション。就学時健診、発達支援センター、特別支援やことばの教室在籍児のアセスメント全般。

\* 個別的介入

保護者及び児童生徒へのカウンセリング、児童生徒とのプレイセラピー、必要に応じて家庭訪問の実施等

### 《 取組の成果 》

- \* 令和5年6月よりスタート。令和6年1月現在、18名の登録（上富良野町の人口は1万人程度）。
- \* 週1回程度から毎日の通所まで、利用の頻度は様々である。
- \* 1日のうち、午前中に1～4名程度、午後に1～4名程度の利用がある。
- \* 他者との視線が交わりにくい場所をできるだけたくさん作り、「程よい距離」を意識した空間をデザインしたことにより、子どもたちにとって居心地の良い環境をつくることできている。
- \* 学校との協働を意識したシステムを稼働させることで、先生方と一緒に様々なケースに取り組むことができている。